

## 審査の結果の要旨

高井良健一

本研究は、中年期の高校教師における教職アイデンティティの危機と再構築の過程と構造を1950年代から60年代生まれの4名の教師のライフストーリーの事例研究によって探究している。この主題に迫るため、本研究は4名の教師たちが42歳から43歳の時（1998年から2006年）と48歳から56歳の時（2011年から12年）の2度にわたる集約的インタビュー調査を行い、2つの調査結果を統合して彼らの中年期の危機とその克服における固有性と多様性、および共通する過程と構造を提示している。本研究は3部15章で構成されている。

第1部は方法論の検討である。教師のライフヒストリー研究の台頭（第1章）と展開（第2章）、および、ライフヒストリー研究とライフストーリー研究の方法論と相互関係（第3章）について先行研究の網羅的かつ子細な検討によって考察し、教職生活における中年期をとらえる枠組みと概念を提示している（第4章）。さらに教職アイデンティティの危機と再構築を探究する分析概念として「時間意識の変容」「ジェネラティヴィティの変容」「同僚性の再構築」の三つが抽出されている。

第2部前半は、4人の高校教師における中年期の危機にいたる過程の調査報告である。九州地方の公立高校、私立高校で数学教師として歩んできた南行雄（以下教師氏名は仮名）のライフヒストリー（第5章）、関東地方の私立、国立の高校で地理教師、西山伸のライフヒストリー（第6章）、北海道と関東地方の公立高校の社会科教師、北原豊のライフヒストリー（第7章）、関東地方の公立高校の社会科教師、東野聡のライフヒストリー（第8章）が詳細なエピソードとして叙述されている。

第2部後半は約10年後に調査された4人の教師の中年期の振り返りのライフストーリーを叙述している。南行雄は「再適応と挑戦の物語」として中年期を語り（第9章）、西山伸は「遅れてきた中年期」を語り（第10章）、北原豊は「危機的な時期」とその危機の再構築の物語を語り（第11章）、東野聡は「危機的な時期」と「遅れてきた中年期」を語っている（第12章）。

第3部は総括的な考察を行っている。教師のライフサイクルと生涯発達心理学の概念による4人の危機の考察（第13章）、「支配的な物語」と「危機の物語」と「支えとする物語」の葛藤による「自分語りの変容」が描かれ（第14章）、それらのライフストーリーの歴史的、社会的文脈として、教育問題の時代状況との関わり（第15章）が論じられている。そのうえで終章において「教職アイデンティティ危機の構造」と「再構築の構造」が提示される。

本研究は、教師のライフストーリー研究の日本における最初の本格的な学術研究である。本研究は、関連する先行研究の網羅的かつ精緻な検討において秀逸であり、4人の教師の14年にわたる集約的調査による厚い記述によって、高校教師の教職アイデンティティの危機を個別具体的な実態に即して開示している。よって本論文は博士（教育学）の水準に十分に達しているものと評価された。